

論文審査の結果要旨

論文題名：

日本の産科医療施設における在日ラオス人女性の産後の伝統的プラクティスの実践可能性

申請者氏名：齋藤 恵子

審査の所見

<論文課題概要>

本論文は、日本における在日ラオス人女性の産後の伝統的プラクティスに関する、日本の産科医療施設での実践の可能性を二つの研究から明らかにした論文である。

<研究内容>

第1研究では、先行文献から採用した6つの伝統的プラクティスに関して、ラオスで生育し、日本で出産を経験した在日ラオス人女性10人への半構造的インタビューから、伝統的プラクティスに関する認識と実践について明らかにした。全ての対象者は6つのプラクティスについて、伝統的慣習として重要な価値を認識しており、いくつかの慣習は簡略され、一部は日本の物で代用しながら実践され、幸福感や安心感を実感していることが明らかになった。一方で、医療施設での医療従事者の認識が、実践における負の要因になっていることも明らかにした。

第2研究では、埼玉県内121の産科医療施設の産科病棟看護管理者を対象に、4つの伝統的プラクティスの認知度、実践の可能性を自記式調査票で調査し、伝統的プラクティスの認知度が低い現状とともに、飲食に関する伝統的プラクティスは比較的可能な施設が多く、特に助産所などの小規模施設での実践可能性が高いことを明らかにした。

<科学的到達・新規性>

審査では、産後の伝統的プラクティスの定義、ラオス人女性の選択理由と少数民族のマイノリティさに関する代表性、研究対象者の年齢の幅による分析への影響、取りこぼしのないデータ分析、時間経過による伝統的プラクティス自体の変化、実践における専門家への介入期待と個人の選択の範囲、伝統的プラクティス実践に伴うリスクなどについて問いかけがあったが、いずれについても根拠に基づく的確な回答がなされ、新規性ととともに、科学的到達を担保することにつながった。

<発展>

日本の在留外国人の数は年々増加している。本研究での在日ラオス人女性の産後の伝

統的プラクティスに関する研究成果は、170 か国以上の少数派といわれる民族の人たちへの理解、さらには、文化の異なる在日外国人の母性看護の向上に寄与する研究であると考ええる。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 横山 恵子

副査：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 朝日 雅也

副査：愛知県立大学大学院看護学研究科 教授 柳澤 理子